

全国大学史資料協議会総会・全国研究会および 同協議会西日本部会総会・研究会参加報告

古賀 敦子

「大学の歴史は個別大学史の枠にとどまるものでなく、他大学や社会との関連を視野に入れて編纂されるべきであり、大学に蓄積された資料は、大学文書館や大学資料館などの常設機関で広く社会に公開・利用されるべきである」との趣意のもと、1996年4月に「全国大学史資料協議会」が設立された。これに伴い、従来から地区別にて活動していた協議会は、全国大学史資料協議会東日本部会および同西日本部会として発足した。2007年4月現在の会員校は、東日本部会59大学、西日本部会33大学となっており、西南学院大学は発足当初から西日本部会の一員として活動している。少子高齢化社会の到来とともに大学の特色化が叫ばれる昨今、大学史に対する認知度・重要度の高まりとともに、国公私立を問わず当協議会に加盟する新規会員校数は年々増加の傾向にある。

協議会の主たる活動として、年1回の全国総会と各部会総会、およびそれぞれの部会において研究会が数回開催され、会員校の大学史編纂やアーカイブズ形成などに関する事例報告や研究発表を通して活発な意見交換が行われる。2006年度は、5月30日に開催された西日本部会総会・研究会、および10月12～13日に開かれた全国総会ならびに全国研究会に、本学から筆者が出席したのでこの場を借りて概要をご報告したい。

1. 2006年度西日本部会総会・研究会（2006年5月30日）

全国大学史資料協議会の西日本部会2006年度総会・第1回研究会は、2006年5月30日、京都市下京区にある龍谷大学大宮学舎で開催された。同キャンパスは、正門をくぐると1879年（明治12年）に国の重要文化財指定を受けた本館、正門、南翼、北翼、旧守衛所が端正な美と調和の中に佇んでおり、訪れる者を荘厳な世界に誘う。総会には会員校、および個人会員の約40名が出席し、(1)2005年度事業報告、決算報告、(2)2006年度事業計画、予算、(3)幹事校の選任、などが審議された。

引き続き行われた第1回研究会では、京都産業大学大学史編纂室吉村信二氏による「京都産業大学40年史の刊行を終えて」についての講演、および立命館百年史編纂室

伊藤昇氏による「『立命館百年史』通史二の編纂を終えて」についての二つの講演が行われた。吉村氏は、京都産業大学創設者荒木俊馬の「教育と研究の81年」を辿ることはすなわち同大学の教学の源流をひもとくことであるとの基本姿勢に立脚し、大学史編纂室を中心に進められている荒木俊馬研究の一端について紹介された。それら一連の活動の成果として、2006年4月からはオムニバス講義形式による「大学の歴史と京都産業大学」（前期2単位）が開講され、在学生在が自校史を通して帰属意識を高める機会となっているとのことである。続いて、伊藤氏の講演では、「立命館百年史通史二（戦後史編1）」の編纂を通して、略年表にみる歴史認識の示し方、小見出しの付け方、全編を貫く教学理念等、の特徴等について、大学史編纂にあたる者にとって極めて具体的かつ有用な指針が紹介された。いずれの講演も、長年大学史に携わってこられた吉村、伊藤両氏の豊富な経験を踏まえての実用的かつ示唆に富むものであり、同年4月から企画広報課勤務となり学院史業務に就いたばかりの筆者は、学院の歴史を掘り下げることの意義と重責を痛感することとなった。

研究会の後、見学した龍谷大学大宮図書館では、同館改修記念特別企画「アジア文化の伝承と発信」が催されており、大谷探検隊資料など同大学が誇る国宝、重要文化財などを含む貴重な展示を見ることができた。1639年（寛永16年）創設の西本願寺学寮としての起源を持つ、同大学ならではの特徴を活かした企画展として極めて印象的であった。

2. 全国大学史資料協議会2006年度総会・全国研究会（2006年10月12～14日）

本協議会の全国総会ならびに全国研究会は、例年秋に全国各地の会員校が持ち回りで大会事務局となり開催されている。2006年は10月12～14日の3日間、全国の会員校および個人会員約65名が参加し広島大学にて開かれた。広島での開催ということで、最終日には呉市にある海事歴史科学館見学も予定された内容豊富なものであった。（筆者は、同科学館見学は都合により欠席。）

〔全国総会〕

総会では、1. 役員会報告、2. 2006－2007年度役員交代、3. 2006年度東・西日本部会事業計画が審議された。両部会では、本全国総会・研究会の開催以外にも、次に示すような主活動を行っている。

〈東日本部会の活動〉

- (1) 総会：2006年5月25日武蔵野美術大学にて総会開催。
- (2) 研究会：2006年7、10、11月、2007年1、3月の計5回開催。(うち10月は全国研究会として開催。)
- (3) 会報発行：会報『大学アーカイヴズ』(B5判、16頁、500部)第35号、第36号を発行
- (4) 部会メールマガジンを不定期に配信。
- (5) 「東日本部会20年史(仮称)」を2007年度刊行予定。
- (6) 「大学史展(仮称)」の準備中。
- (7) 「研究叢書」第7号の刊行を西日本部会と共同で準備中。
- (8) 各地域の大学史関連諸機関・史料保存機関等との交流。
- (9) 西日本部会と合同で協議会ホームページの開設準備中。
- (10) 幹事会を年間7回開催。

〈西日本部会の活動〉

- (1) 総会：2006年5月30日龍谷大学にて総会開催。
- (2) 研究会：2006年5、7、10、12月の計4回開催。(うち10月は全国研究会として開催。)
- (3) 会報発行：会報『西日本部会会報』第20、21号を発行。
- (4) 「研究叢書」第7号(東日本部会が主担当)、第8号(西日本部会が主担当)の作成準備。
- (5) 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会、企業史料協議会との合同研究会を部会内の活動として準備中。
- (6) 各地域の大学史関連諸機関・史料保存機関等との交流。
- (7) 東日本部会と合同で協議会ホームページの開設準備中。
- (8) 幹事会を年間5回開催。

〔会場校挨拶〕

総会の後、広島大学長牟田泰三氏が会場校挨拶として歓迎の意を述べられ、挨拶の中で「広島大学が現在の東広島市に移転を完了して10年を迎えた。自然に恵まれた傾斜地のキャンパスであり、建設中の建物も残る移転当初は泥濘も多く長靴は必携であった。以降、整備を進め、現在では大学と地域との交流も根付いてきた。これから更なる発展の基を築いていきたい」と語られた。

〔記念講演〕

続いて行われた記念講演では、広島大学文書館長小池聖一氏により、「大学文書館における個人文書の位相—広島大学文書館を一例に」と題した講演があった。広島大学文書館パンフレットには、「広島大学文書館は広島大学のアーカイヴズ (archives) です。アーカイヴズとは、『人または組織がその活動の過程で作成、受領、収集した記録のうち、継続的価値を持つものとして保存されているもの。また、それらの記録を管理、保存し利用に供する公文書館等の機関や施設』を意味します。ですから広島大学文書館は、広島大学がその活動の過程で作成、受領、収集した記録、すなわち事務文書（法人文書）のうち、継続的価値を持つものを管理、保存し利用に供する機関ということになります。」と、同館の機能、役割を紹介している。小池館長は講演の中で、「広島大学文書館における個人文書は、(1)建学の精神・理念の保存・継承を象徴する個人文書、(2)事務局文書を補完する個人文書、(3)大学史に関係する個人文書、(4)地域貢献事業に関連する個人文書、(5)卒業生（校友会・同窓会）等の個人文書に分類され、それらを a. 大学管理・運営関係個人文書と b. 教育・研究関係個人文書に類型化し、更に①建学の精神・理念を象徴する個人文書、②大学運営・政策過程を補完する個人文書、③大学を規定する地域・社会関係の個人文書、④大学構成員の個人文書、に分類し分析している。現状では、a. 大学管理・運営関係個人文書、が中心であるが、今後、『知の源流プロジェクト』を活用して大学構成員や校友会などに呼びかけ、個人文書の戦略的収集を行い、文書館を大学のシンクタンクとして、また同時に教育研究機関として、機能充実を図りたい。」と述べられた。講演後、文書館ツアーが実施され、同館が誇る森戸辰男記念文庫や平和学術文庫を実際に見学することができたのは収穫であった。

〔全国研究会〕

2006年度全国研究会は、「大学アーカイヴズにおける個人文書～個人文書の整理・公開の現状と課題」をテーマに3件の研究発表ならびにパネルディスカッションが行われた。それぞれの発表事例の要旨を以下に記す。

◇高坂薫氏（甲南大学文学部教授）

「甲南大学創立者 平生鈇三郎日記の教育と研究」

大正8（1919）年に甲南学園を創立した平生鈇三郎の日記、書簡、講演会報、雑誌掲載記事などの個人文書を通して、創立者の人生、社会、仕事に対する考え方を辿っている。特に日記は全188冊を残しており、現在その翻刻をすすめ、教育研究に生かすとともに出版して公開することを進めている。平生日記の研究は、甲南大学総合研究所の平生研究会を中心になされ、その教育的利用は、前・後期2単位の特設科目と

して実現した。日記は2009～12年に刊行する予定であるが、約一億円の予算をかけて全24巻として完全版とするか、もしくは日記抄としてコンパクト版とするか、また、研究者向けに完全原稿をデータベースで公開するか等、検討すべき課題が未だ残っている。

◇玉置栄二氏（桃山学院史料室）

「柳原吉兵衛・貞次郎関係資料の受入・整理・公開」

貴重な資料であると評価されない、あるいは貴重な資料であると評価されるが、大学を挙げてまで取り組むことにならない資料。このような資料について、できる限り少ない予算で、また少ない人数でどのような対処が可能かということについて事例報告された。桃山学院史料室では、1991年から98年の期間に、4回に亘って、桃山学院の理事であった柳原貞次郎とその父吉兵衛の個人資料を遺族から寄贈を受けた。それらの資料の分類と目録の作成から、データ化、デジタル化による保管の工夫、また閲覧、公開の方法などの具体例が報告され、今後の課題として保管環境の改善等について検討していることが紹介された。

◇堀田慎一郎氏（名古屋大学大学文書資料室）

「大学文書資料室における個人寄贈文書の収集・整理・公開とその問題点」

①「個人文書」とは何か（定義）、②「個人文書」にはどのようなものがあるか（分類）、③何を収集し受け入れるべきか、④どのように収集し、受け入れるべきか、などについての見解が示され、整理・公開の方法や公開基準の設定について、「個人情報保護法」や「独立行政法人個人情報保護法」、「独立行政法人個人情報公開法」などの法令に照らした公開基準（公開制限）の設定等についての見解が報告された。大学アーカイブズのあり方や、他の所蔵資料（法人文書など）との関係を視野に入れながら、大学アーカイブズの個人文書についての問題提起がなされた発表であった。

3. 全国大学史資料協議会の活動全般について

前章にて本協議会の2006年度事業計画に若干触れたが、読者諸氏の中には、本協議会の存在について余りご存知なかった方々も多々いらっしゃることと推察する。恥ずかしながら、筆者も2006年4月に学院史担当部門に異動するまでは、大学史研究、史資料に関して極めて漫然とした認識しか持ち得ていなかったことを打ち明けねばならない。そこで、この紙面を借りて、全国大学史資料協議会会員校の活動について、そのごく一部を順不同に紹介し学院史認識の参考に供したい。

同志社大学：同志社発祥の地である旧新島邸は、1985年に調度・家具類とともに京都市有形文化財の指定を受け、1990年には新島襄生誕150周年記念事業の一環として復元され、1992年からは一般公開されている。同邸を含む大学史資料は、同志社社史資料センターにて管理されている。

大阪大学：2010（平成22）年文書館開設を目指して、2006（平成18）年7月に文書館設置準備室が開設された。同準備室では、「阪大百年史」編纂に向けて法人文書や阪大史に関する貴重文書の調査、収集などを行う。

大東文化大学：2006（平成18）年4月に大東文化歴史資料館を開設。同時に、大東アーカイヴズ活動の一環として、自校史教育科目「現代の大学」を開講した。ニューズレターも創刊され、同資料館からの情報発信にも積極的である。

九州大学：2011（平成23）年に創立百周年を迎える九州大学では、2005（平成17）年に大学文書館を開設。同大学の歴史、伝統を記録に留めることによって、百年史の編纂などの記念事業に備えている。

西南学院でも2006年の創立90周年を機に西南学院史紀要が創刊され、年史編纂に向けて西南学院百年史編纂準備委員会が発足した。学院百年の歩みを画像や文書データで後世に残すことは、とてつもなく壮大な事業である。結果や成果を急ぐ効率主義が優先しがちな現代にあつて、なぜ過去の事象を探ることに各大学はかくも膨大なエネルギーと時間を割くのであろう。それは、大学の起源を知るとはすなわち、自分の立ち位置の確認とこれから向かうべき方向を見いだすことに繋がっているからに他ならない。まさに、立命館百年史編纂室だよりに記されるように、「現代の課題を歴史のなかで確かめる」ためである。

最後に、本協議会全国総会参加のため訪れた広島大学文書館パンフレットには、The National Archives, Washington D.C., USA の玄関台座の一文が引用されており、その言葉が筆者の心に強く残ったので紹介したい。

The heritage of the past is the seed that brings forth the harvest of the future.
(過去の遺産は、将来の実りをもたらす種子である。)